風の末裔シリーズ・3rd シーズンの6

～サンピラー〈ダイヤモンドダスト〉～

©西風そら

http://nisikaze.sakura.ne.jp

「お父さまのバカァ!!」
執務室のパオの入り口で真っ赤な顔をしたユユにぶつかって、ナナは壁にしたたかに背中を打ち付けた。妹は大股で走り去って、室内には困り顔の父親が取り残されていた。
「またですか…」
双子の兄は肩をちょっと竦め、視線を父親から、奥の大机のノスリ長に移した。ノスリも書類から上目を出して、肩をすぼめている。
ここの所、妹と父は、事ある毎にいさかいを起こしている。脱力する程、他愛ない事で。
婚礼の儀式をどーするのこーするの、日取りの縁起が良いの悪いの、振る舞い菓子の数とか種類とか。外野からしたら溜め息の出そうな些細な事々だが、ユユの決めて来たそれらを、ツバクロがことごとく難癖つけて否定するのだ。
「分かっているんだけれどね…」
ツバクロも仕事に飛び立ってから、ノスリがうんざりとナナに言った。
「何にだって一言は難癖付けたいんだ。拗ねてるの、子供みたいに。娘を持つ父親なら、いっぺんはかかる、麻疹(はしか)みたいなモンさ」
ナナは机の書類を繰りながら苦笑いした。
「詳しいですね」
「俺は人生で十回以上経験している」
「あっ、そうか!」
ノスリ家は十数人の子沢山だった。
「でも、女の子は七人でしょう?」
「男の子は相手方の父親がその症状になる。それに付き合ってなだめるのは、こっちの父親の役目」
「……そう…か…」
ナナは書類に目を向けたまま、ちょっと止まって目を伏せた。ユユの相手にはその父親も、親族も、誰もいない。
「ぼ、僕…、君の、父親になンのォ?!」
数日前…。
夜中の執務室で、カワセミがかしこまってそれなりにキチンと挨拶した(出来た)というのに、ツバクロの第一声はそれだった。
部屋の奥のノスリとナナは、まあ、薄々そうなるかも…と予測していたので、大して驚かず、黙々と明日の仕事の段取りをしていた。
「……ああ、そうか……」

当のカワセミは普段と変わらずのほほんと、反応がワンテンポ遅い。
「でも、別に今まで通りでいいんだろ？　勿論キミが『おとうさん』って呼んで欲しいのなら、そうするけれど…」
これが皮肉じゃなくて大真面目に言っているもんで、奥の二人は笑いを堪えるのに一苦労だった。
そして、その日からツバクロは微妙〜に、ご機嫌斜めなのだ。
カワセミはと言うと、それまでの気難しさが薄れて、穏やかに上機嫌に仕事に勤しんでいる。
カワセミが順調だと、執務室は実に潤滑に回る。悔しいけれど、カワセミは、精神的に事足りていれば、とっても優秀なのだ。これまで何日も掛かっていた事態を半日で収めて来たりする。ノスリは長の机に就任して以来、一番安泰な気分を味わえていた。
「ツバクロ、頼むから、カワセミをこのままそおっとしておいてくれ」
相棒に懇願されて、父親の不機嫌の矛先は娘に向いてしまうのだった。
「心配なんですが…」
ナナが読み終えた書類を折り畳んで懐に入れながら呟いた。
彼は今日から西の砂漠の土地に出向する事になっている。西風の里の常駐を、大長と一時交代するのだ。
「父上は優しいんだけれど、頑固になったら一途なんです。一度機嫌を損ねるとやっかいになる。僕がいない間に、拗(こじ)れなければいいんだけれど…」
「まあ、俺も気を付けてフォローするよ」
「第一、里に来た時から、ユユはカワセミ長に預けていたようなモノだったじゃないですか。フビライの所に何年もいた時だって、父上はこんなに不機嫌にならなかったのに…」
「ナナ、そうゆうのと、こうゆうのは、違うの。ん、ん〜〜…心持ちの問題…だな」
「…？？」
「ナナも娘の親になると分かる」
「はあ……」
そういえば双子の片割れのこの兄に、その手の話が全く浮かんで来ないのは、この気苦労性のせいだろうか？
「それよりお前、気を付けろよ。西風の一族…、ツバクロの話だと、かなり凶悪な部族らしいぞ。寝る時は部屋の入り口にバリケード作れって言っていた位だからな」
戦々恐々と飛び発つナナを見送って、ノスリは事務を片付け、帰途に付いた。

「ねえ、あなたからも何とか言って下さいな」
帰宅したノスリは、妻のフィフィに捕まった。
フィフィは幼名で、もう立派な名前があるんだけれど、幼馴染み達の間では、何となくフィフィで通っていた。
「どした?」
ノスリは小声で聞いた。奥では、小さい子供達が寝ている。二人の子供達は独立したし、成長したナナは大長の、ユユは父親の自宅にそれぞれ移っているのだが、この家は相変わらずの大家族だった。
ノスリとフィフィは、親のいない子供や親が留守がちな子供達をいっしょくたに引き取って、コロコロ育てているのだ。永遠の親父さんとお袋さんなんだ。
「あのねぇ…、またユユが愚痴をこぼして、今日は半泣きだったの。ツバクロが子供みたいに意地っ張りなのは昔からだけど、いくら一人娘でも、いい加減腹くくったら?って」
「うーん…」
ノスリはツバクロの心持ちがちょっと分かるだけに、即答は出来なかった。
「あなただって、ユユの育ての親じゃない。ユユに幸せになって欲しいでしょ。カワセミがやっとその気になってくれて、私だってホッとしているのよ」
「へぇぇえ!!」
「…?…なによ?」
「お前の子供時代からは考えられない台詞だな」
そう、フィフィとカワセミはお互い天敵同士で、カワセミがフィフィを怒らせては追い掛け回される図は、当時の里の風物詩だった。
「あの頃は…、子供だったのよ!」
お団子の妻は昔みたいにむくれた。
「私はただ、カワセミの伴侶になれるのなんて、ユユ以外にはいないって…」
むくれてからいきなり真顔になって、顎に指を当てた。
「そう…そうだわ。さっきの、訂正!」
「ん~?」
「私、カワセミにも幸せになって欲しいんだわ。ユユ以外に、カワセミを幸せに出来るヒトなんていないから…」
＊＊＊
フィフィがふと漏らした一言で、ノスリも気持ちを新たにした。ユユだけではなく、子供の頃からの相棒カワセミの一世一代の幸せが掛かっているんだ…と、改めて思い直したのだ。
『あの』カワセミと一緒にいられる女性なんて、この地上に

どれだけいるっていうんだろう？　妖精の一生は長いといえど、その希少種に巡り逢える確率なんて、きっと天文学的数字に違いない。
　思えばそんな確率に二度も当選しているんだから、女性運だけは滅多やたらあるんだろうな、あいつ…。

　朝イチの執務室には既にツバクロがいた。
「早いな」
「うん、ナナがいないからね。手紙の束、こっちに運んどいて良かったんだろ？」
「…ああ、サンキュ」
　こういう所は優しく気配り出来る奴なんだが…。
「今日、奴は？」
「え？　ああ、カワセミね。東の湖に出向中で、…今日あたり帰って来るんじゃないか？」
「……そう…」
　ツバクロは気に止めない素振りをしながら、手紙を開封して揃える。
「なあ～、ツバクロォ」
「なんだ？」
「気持ちは分かるけどよ…、俺も何人も娘を送り出しているし」
　ツバクロはペーパーナイフを乱暴に机に置いた。
「何人もだろ。僕、一人娘なの！　たった一人！」
「何人でも一人でも一緒だよ…」
　ノスリが抑えた声で言って、ツバクロも俯(うつむ)いた。
「……ごめん…でも…」
「ん～？　この際、何でも言ってみろ」
「この間まで子供だったんだ。それが急に大人になって、あっと言う間に嫁ぐって言う。もうちょっと、その…猶予期間が欲しかったっていうか…」
「ああ……」
　ノスリは何とも言えなくなった。
　確かにユユはずーっと子供で、急にサナギの背中が割れるように大人になったのだ。ツバクロにとっては『年頃の娘の父親の心準備』をする暇がなかったのだろう。

「うふふふ……うふふふふ…るるるん♪…」
　空気を読まないこの笑い声は……。
「ただいまぁ!!」
　入り口の御簾が元気よく開いて、最近妙に若々しくなった大長が朗らかに入って来た。
「何ですか、お通夜みたいな顔をして。何か悪いモノでも食べ

たのですか？」
「…大長……」
　朝っぱらからのテンションに着いて行けないノスリはぎこちない笑いを返し、ツバクロの肩からは上着がずり落ちた。
「ナナとは昨日引き継ぎをして、ちょっと寄り道して今、戻って来たのです。ところで、ツバクロ！」
「…は、はい…」
「手紙で知って、嬉しくて飛び上がっちゃいました。この度は、おめでとうございます！」
「…あ…はあ…」
「ナナに聞いた所に寄ると、貴方は喜びの余り、ユユにお祝いの言葉も言い忘れているようですね！」
「……」
「そんな貴方にビッグな贈り物を用意しました！　今すぐ私の家へ行って下さい！」
「……」
「さあ、早く！」
　茫然となすがままのツバクロの背中を押しながら、大長はノスリにウインクした。慌ただしく二人が出て行って、残されたノスリは心配顔でポツリと呟いた。
「あのヒト……時々『ハズす』からなァ……」

　少し小高くなっている大長の自宅の前には、何故かフィフィがいた。
「あ、ツバクロ！　早く早く！」
　大長とお団子女将に背中を押されて、ツバクロはフラフラと室内に踏み込んだ。
「……?!」
　天窓の朝の光の下に立つのは……。
「君…？　狼……？？」
　長いヴェールを揺らして振り向いた女性には、しかし見慣れた羽根が無かった。
「あ、お父さま」
「ユユ?!」
　ユユは、裾と袖が百合の花のように広がった総レースの衣装を着て、夢見るような表情でゆっくり回っている。
「あの子がねぇ…、いつかユユの晴れ着にと、ちょっとづつ編んでいたんですって」
　後ろで大長が嬉しそうに解説して、ツバクロはこれが自分の娘かと見迷う天女に目を見開いている。着ている物のせいか、背もいきなり伸びたように見える。
「あの子の娘ですから、似るとは思っていましたが…こんなに面影そっくりになるなんてねぇ…」

「そう、蒼の狼さんって、こんなに素敵な方なのね。ツバクロがノックアウトされるのも分かるわ」
　暢気に会話している二人の横で、父親の目に急に光が走った。やにわに娘に駆け寄って、衣装ごとしっかと抱きすくめる。
「ダ…・メ・だ!!」
「…え?」
　ユユはびっくりして目を丸くした。
　大長もフィフィもハタと止まった。
「やらない！　誰にもやんない！　僕の大切なユユ！」
「まだそんな事、言ってンの?!」
　フィフィが呆れ声を出す。
「うるさい！　じゃあ、聞くが……幸せになれるか？　ユユは。カタカゴはどんな一生を送った?!　幸せになれたか?!」
「お父さま!!」
　ユユが叫んでツバクロの手からすり抜けたのと、大長とフィフィが入り口を振り向いたのと同時だった。
　……ペタン……
　乾いた音がして、水色の妖精が其処に座り込んでいた。水色の目を真ん丸に見開いて、口は半開きだ。
「カワセミ！」
「……」
　カワセミは黙って立ち上がって、スウッと後退りして御簾の向こうに消えた。ユユも父の言ってしまった事に凍り付いていて、一瞬カワセミの方に駆け寄るのが遅れた。御簾の向こうに、もうその姿はなかった。
　そして…それから……蒼の里から、水色の妖精の姿は消えた。
＊＊＊
「ユユ――」
　放牧地の土手の上で膝を抱える娘の所に、ノスリが書類を掲げて近寄る。
「仕事！　カワセミのいない分、自分が頑張るって言ったろ」
「うん、ごめんなさい…」
　ノスリは沈んだ顔の娘から目をそらして、放牧地を見やった。春には金鈴花の黄色い絨毯が広がるが、今は冬枯れの寂しい野原だ。
「なあ、ツバクロを許してやってくれ、いい加減」
　ユユはうつ向いたままかぶりを振った。
　ノスリは溜め息一つ付いて、切り出した。
「ユユ…、奴が口にするまで俺も深く考えなかったんだ。もし、俺の娘がカワセミと一緒になりたいって言ったら…俺は素直に喜べただろうか？　って」

「そんな?!」
ユユは激しい目をしてノスリを睨んだ。
「ノスリ長も、お父さまも、カワセミ様の親友でしょ?!」
「ああ、かけがえのない仲間だ」
ノスリは哀しそうにユユに睨まれたまま答えた。
「尊敬している。信頼もしている。大好きだ。だけれど、大切な娘を託せるかというと、別の次元だ」
ユユの目が厳しくなるが、ノスリは続けた。
「あいつは……大切なモノが欠けているんだ。自分を庇護する本能が。遮眼帯を付けた馬みたいに、いつも一途に一直線。…なあ、自分を護れない者といると、共にいる者はどうなる? 父親となるとどうしてもそれを心配してしまう。当然なんだ」
ユユのノスリを睨む力は少し緩んだが、視線はそらさなかった。
「お父さまの気持ちは分かった。でも、アタシ、そんなに頼りない子供じゃない!」
「じゃあ、大人になって、ツバクロを許してやってくれ」
ノスリはユユの肩に大きな手を置いた。
「大長だって、責任感じて落ち込んでいるんだ。ユユの晴れ姿を見せて、ツバクロの気分を上げようとしたのが裏目に出て…。お陰でてんてこ舞いの俺を可哀想に思ってくれ」
ユユは息を吐いて立ち上がった。
「カワセミ様が戻ったら、ノスリ長は味方になってね」
「ああ…」
「それから、カワセミ様の前で、二度と誰も巫女様の事、口にしないでね…」
「ああ…」
あの後、カワセミを捜しに行くと駄々をこねるユユをなだめたのはノスリだった。
「カワセミは大丈夫だよ。今までも術が逃げたとか言って、たまにいなくなっていただろ? でも精神が落ち着いたら、ちゃんと帰って来たじゃないか」
「……」
「ユユ、カワセミの伴侶になりたいんなら、いつまでも奴に振り回される子供じゃ駄目だ。一歩先に行って奴のフォローをするのが相棒の役割だぞ」
ユユは神妙にうなずいて、カワセミのやっていた仕事を引き継いだし、ノスリは密かにそれを、ユユでも出来る簡単な物にすり替えた。
ツバクロは魂の抜けた蝋人形のようだった。
娘と親友、一気に傷付けてしまった。そして自分の心の奥底

の、自分勝手な冷たい心に気付いてしまった。頭の表面では親友だと思いつつ、一番大事な所で突き放して見ていたんだ…。
　仕事をこなして帰っても、執務室の長椅子の肘掛けで茫然自失としていた。大長が後ろに立っても気付かず、肩を叩かれて初めてこの世に戻った。
「ツバクロ、大丈夫ですか？」
「僕……すいません…」
「いえ、私が貴方の気持ちに気付けなかったのがいけなかったんです。貴方の心配は当然なのに」
「……」
「今日はもうお休みなさい。私もたまには昔みたいに長の机で仕事をしてみたいですから」

　執務室を出てフラフラ歩くツバクロを、不意に引っ張る手があった。大勢の子供を引き連れたフィフィだ。
「そんな顔してたら、親衛隊の女の子達がガッカリするわよ！丁度良かったわ、暇なら手伝って！」
　フィフィは自分の子供達が修練所を卒業すると、また教官に復職していた。今や肝っ玉母さん教官として名物だ。
「この子達、今日から馬に乗り始めなの。一つお手本を見せてあげてよ」
「……」
　そんな気分にはならなかったが、昔っから逆らえないフィフィの強引さと、キラキラと期待に満ちた子供達の瞳に引っ張られた。
　馬を曳いて、里の奥の放牧地でお手本飛行ついでにアクロバット飛行を幾つか披露した。子供達は大喜びして、ツバクロもちょっと喉かな気持ちになれた。
　それぞれの馬で飛び乗り飛び降りを練習している子供達を、ツバクロはフィフィと並んで眺めていた。
「二回転宙返りを軽々こなす貴方にも、あんな時期があったなんて嘘みたいね」
「ああ…、馬をこっそり引っ張り出して、雨の中沼地に埋まったりしたっけ…」
「あはは、それ、ノスリに聞いた！　子供って大人から見ると危なっかしくてしょうがないけれど…、ああっ!!　こらっ!!」
　フィフィは勝手に飛んでみようとする子供を見付けて、指を鳴らして馬を制した。
「まったく、男の子って順序をすっ飛ばすったら…。ユユも男の子に混じってホント手を焼かせる生徒だったわ」
「……」
「だからいつだって目を離せなかった。今もよ」

「……」

「ねぇ、ツバクロ…、ノスリもそうだけれど、男親ってどうして娘を『やる』って感覚なのかしら？　私は自分の娘も息子もずぅっと自分の子供で、独立しても目が離せないわ。ユユだってそう。お嫁さんになっても独りぼっちになんかならないわ。だから、何も心配しないで、ただ好きなヒトの所へ行ったっていいじゃない…」

「…フィフィ…」

「私は何てったって、あの二人に幸せになって欲しいの」

時間が来て、フィフィは手を挙げて、集合を掛けた。子供達は元気に挨拶し、去り際にフィフィは一言付け加えた。

「所で、大切な事、忘れていない？」

「…？？」

「貴方が共に慶ぶべきヒトの所にちゃんと話に行かないから、私が気を回す羽目になるのよ。女親の見解をしっかり聞きに行きなさい」

「……あ……」

ツバクロは本当に大切な事をすっ飛ばしていた。

そんな二人に呼応するように、夕空の中に黒い点が現れた。

「…？…草の馬？？」

みるみる近付いた影は痩せた草の馬だったが、しかし騎手は乗せていなかった。

「…カワセミの……馬…!!」

＊＊＊

カラ馬で帰って来たカワセミの馬は、鞍に手紙を付けていた。

「…カワセミ!!」

細くたたまれた紙片に指を何回も空振りさせながら、ツバクロは急(せ)いてそれを開いた。フィフィも子供達を待たせて、横から覗き込む。しかし、文字はカワセミの物ではなかった。

ツバクロに見馴れた文字は、蒼の狼の物だった。

南西の山岳地帯の陵に住む蝙蝠熊の一族が、雪山をフラフラ歩く草の馬を見つけた。乗り手は見当たらなかったけれど、風出流山(かぜいずるやま)に住むお姫様(蝙蝠熊は、蒼の狼の事をそう呼んでいる)の馬に似ていると、神殿に知らせに来たという。

「…雪山に…馬だけ?!」

「急いで飛んで。私は皆に知らせて来る！」

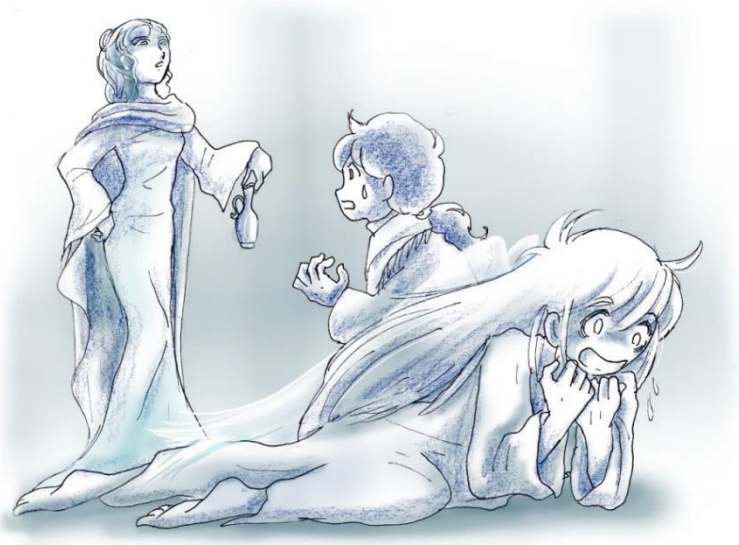
「頼んだ…!!」

手綱鞭一閃、夏草色の馬は一瞬で彗星となり、息を呑む子供達を現地解散にして、フィフィは執務室へ走った。

風出流山…、降りしきる雪の中、樹氷がそそり立つ神殿前の

雪原に降り立ったが、いつもすぐに気付いて出迎えてくれる蒼の狼の姿はなかった。玄関が氷の壁に覆われている。
「ツバクロ殿?!」
後ろから声がして、振り向くと蒼の狼が珍しい乗馬姿でそこにいた。
「ヒトのいられそうな所は捜してみました。でも、昨日からの雪で足跡もなくて…」
「……」
「一体、どうしたっていうんです。身体の弱いカワセミ殿が、何で雪山に来るんです?」
「……」
ツバクロが何も答えられず、動揺しているので、狼も質問をやめた。
「とにかくまだ陽があります。気温が下がる前に捜しましょう」
「あ、ああ……」
余計な事を考えている暇はない。いくら羽根のあるカワセミでも、この山の気温はヤバイ。
慌てて乗馬しようとして、ツバクロは雪の塊に足を取られて転んだ。
「ああ！　なんだってもう、こんな時に!!　・・・?!!」
ツバクロは足元を見て、口をあんぐり開けた。雪の塊から水色の髪が覗いていた。
「カ、カワセミィ〜〜!!」

暖炉の火を全開にして、ありったけの毛皮を集めた。ツバクロが身体で暖めて、水色の妖精はやっと頬に色が戻った。トクトクいう鼓動を感じて、ツバクロは心から安堵した。心から安堵出来た自分に、心から安堵した。
「まったく何て無茶苦茶なヒトなの?!　あのまま気付かず、神殿の入り口を塞いだまま二人で一晩中山を捜していたら、カチンコチンの凍死だったわ」
蒼の狼は桶に湯をはりながら珍しく苛ついていた。
「確かにこの神殿は人間の身のトルイだって辿り着けたわ。でも闘牙の馬ですぐ下まで飛べたからよ。普通の草の馬じゃ、ジェット気流に乗らない限り山陵がやっと。そんな事が分からない方ではないでしょうに」
「…うん……」
ツバクロは言葉少なにカワセミを抱え直して、細っこい手足を湯で温めた。自分がジェット気流に乗れる能力がなかったら、果たして、歩いて蒼の狼に逢いに来ようと思えただろうか…?
物入れを探っていた狼は、小さな瓶を持って戻って来た。
「カワセミ殿の顔をこちらに向けて下さい」



「え？　…うん」
　ツバクロが水色の頭を抱えて狼の方へ向けると、狼は、やにわに眠っているカワセミの鼻を摘まんで、瓶の中身を口に流し込んだ。
「ふがあぁぁあ――っっ!!!!」
　瞬間、カワセミは、バネ仕掛けのオモチャのように飛び上がった。
「げほぉごほぐほごぼぼぼぼ!!」
「…狼…？」
「冬眠中の熊も目を覚ます、純度97％ウォッカです。雪山を舐めるとこういう目に遭うんですよ！」
　狼は、喉を押さえてのたうち回る哀れな水色の妖精を、仁王立ちで睨みながら言った。
　おっかない…。ツバクロはこのヒトを怒らせるのだけはやめよう…と、心に誓った。
「さあカワセミ殿、ワタシに何か用事があったのではないのですか？」
　狼は、まだうつ伏せでぜぇぜぇ苦しんでいるカワセミの首根っこを引き上げた。
「がほげほ・・・だ・さい・・・」
「……え…？」

「・・・を・・・に・・ださい・・」
「……」
狼はツバクロと顔を見合わせた。水色の妖精は喉を振り絞って息も絶え絶えに、やっとその一声を発した。
「・・ユユを、ボクに、ください・・」

「蒼の狼さんそっくりのユユを見て、大事な事を抜かしてた事に気付いたんだ」
落ち着いたカワセミは毛皮の山に埋もれながら、うつ伏せなまま話し出した。
「『おとうさん』には挨拶したけれど、『おかあさん』にまだ挨拶していなかったって…」
「……」
「……」
「遠かったあ…」
カワセミは大真面目に目を細めて笑った。
「…その為だけに……命賭けて雪山を歩いて来たんですか…?」
狼は怒る気力も失せたように脱力して言った。
「うん、だって、一人しかいないムスメでしょう。挨拶される機会も一生に一度なんだから、ちゃんとやんなきゃって。そんな大事なこと忘れていたなんて、ショックで腰が抜けちゃった」

呆れた狼は額に手を当てながら、熱いお茶を入れる為、雪を取りに行った。
狼がいなくなってから、カワセミはうつ伏せたままポツンと言った。
「…巫女は、幸せだったよ…」
ツバクロは暖炉の前で膝を抱えたままピクンと動いて、そのままの姿勢で答えた。
「随分な自信だな」
「ううん…、心で繋がっていたじゃない。巫女が幸せか不幸かなんて、すぐ分かった」
「…あ、ああ…」
「巫女がね、不安で不幸な心を芽生えさせたら…、夢の中でボクが引っ張り上げられない位沈んでしまったら…、終わらせたよ」
「…?…何を?」
「巫女にあの生活を辞めさせた。あの時僕に出来た全力を使って」
「……」
＊＊＊
「それをユユに当てはめてはいけないですよ」

振り向くと、狼が雪を詰めた木桶を下げて立っていた。
「ユユが不幸だと思ったら、終わらせないで、幸せに出来るよう頑張って下さい。今の貴方はあの時と違って、沢山の事が出来るんですから」
「……はい…」
カワセミはいつの間に、正座して殊勝に返事した。
「それから、こんな猪突猛進も、これ限りにして下さい。個人的には貴方のそういうの大好きだけれど、母親としてはお仕置きモノですよ」
狼はさっきのウォッカの小瓶をちらつかせて、カワセミを見据えた。
「……はい……」
「……」
ツバクロは目をパチクリしていた。フィフィの言った通りだ。女親って凄い…！　自分の心配事なんか、鼻息一つで吹き飛ばしてしまった。
「さあ、分かったら、少し休みましょうね。これで手足の先まで暖まる筈です」
狼は今度はウォッカを一滴お茶に落として、母親がミルクを与えるような表情でカップを渡した。
本当に『おかあさん』には敵わない……。
カワセミは安心と疲れが一気に来て、毛皮に埋もれて熟睡に入った。ふにゃふにゃ言い出したら、もう滅多な事じゃ起きない。
狼とツバクロは暖炉の前に並んで座った。
「貴方…、反対だったのですか？」
蒼の狼は暖炉の炎を眺めながらポツンと言った。
「いや、別に…、そんな、はっきりとは…」
「貴方の気持ちも確かめず……浮かれて衣装なんて送って、すみません…」
「いや、そんな……」
「貴方が反対の気持ちなら、ワタシも諸手を挙げて賛成という訳には行かないわ。一度ユユも交えて、話し合いましょう」
狼は肩が沈んで、本当にがっかりした感じだ。
「君…、君は、諸手を挙げて嬉しかったの？」
「勿論よ、どうして？」
「どうして…って、こっちが聞きたいよ」
「だって『あの』ユユよ。我が儘で気紛れで自分勝手ですぐ拗ねる。あの子の伴侶が勤まる忍耐強いヒトなんて、この地上に何人いるっていうの？　それこそ、この山に徒歩で登って来る位の忍耐がないと…」
「……」

ツバクロは、ただ盲目的に娘を溺愛していた自分に気付いて、急に不安になった。ユユって客観的に見たら、そんなにアレなお嬢さん…なのか？

「それにね…」

狼は隣のツバクロに向いて、自分の胸を指差した。

「昔ワタシがしていたペンダント……覚えてる？」

「あ、ああ…」

狼が神殿に移り住んだ頃…、彼女はいつも薄ピンクの平たい石を金鎖に通して首から下げていた。ユユが山を降りる時、それはユユに譲られた。

「大昔、白い森でカワセミに貰ったって言っていた奴？」

「ええ、そう…、運気が上がるって言って、くれたの」

「ああ、それは聞いた」

当時のツバクロは、彼女が他の男性のくれた物を肌身離さず持っていたので、ちょっと複雑だった。

「それね……」

狼は胸に指を当てて、もう無いペンダントの跡を辿った。

「あの頃、貴方がちょくちょく神殿を訪ねて下さったでしょう」

「…うん…」

「貴方が近くまで来ると、石が光って震えて教えてくれたの」

「ええっ?!」

ツバクロはびっくりしてお茶のカップを落としそうになった。そんなの、初耳だ……。

「小さく可愛くフルフルと。だからいつも外に出て、貴方が降りて来るのを迎える事が出来たわ」

「は……あ…」

「不思議に思っていたらね、兄様が笑いながら教えてくれたの。カワセミは石の効能をフィーリングで勝手に決めているから、時々核心からズレる…って」

「…核心…」

「あれね、『自分の運命のヒトに巡り逢える石』……だったんですって」

「え…？　えぇえっ!!」

ツバクロは今度こそカップをひっくり返して、その場で飛び上がった。

自分の決死のプロポーズを妙にあっさり受けてくれたのは、その石のせいっ？　っちゅーか、回り回って、カワセミのお陰〜〜っ？

「勿論、石だけのカじゃないですよ」

狼はこぼれたお茶を拭きながら、ツバクロの心持ちを見透かすように言った。

「ここで独りになってからなのです。石が貴方に反応するようになったのは…」
「…え？　えっと…？」
「ワタシの寂しいのを少なくしたい…という貴方の真心が、石に伝わったのだと…ワタシは思っています。可笑しいですか？」
狼はちょっと照れ臭そうに俯いた。
「だから、ユユも、貴方のような方に巡り逢えますように…って、あの石をあげたの。そしたら里へ降りた翌日にもう、石が震えて光ったっていうじゃない。相手を聞いてびっくりしたけれど、ホッとした」
「君は…そんな昔っから分かって、心構えが出来ていたんだ」
ツバクロは初めて聞く話に、狐に摘まれた気分だった。
「話してくれれば僕だって、心の準備が出来たのに」
「あら、運命は石一つに左右されるモノではないでしょう？」
狼は暖炉の炎に照らされながら、羽根を揺らして首を傾げた。
「ユユも、石は震えたり震えなくなったり、って不思議がっていたわ。下手に教えちゃ、意識してダメだと思ってね。運気が上がる、としか教えていない。こういうのってね、占いとかおまじないの類いと一緒。他愛もない、心の寄っ掛かりなの…」
「……」

玄関でけたたましい音がした。
厩舎代わりのホールで、草の馬の興奮したいななきが響く。
慌ただしい足音と共に飛び込んで来たのは、長い巻き髪を振り乱したユユだった。
「お父さま!!　カ…カ…カワセミ様は?!」
ツバクロが指差すより先に、毛皮の中の水色の頭を見つけて、ユユは足をもつれさせながら駆け寄った。
「あ・あ・あ・・・よかった、よかったあ・・」
娘の前髪と睫毛は、凍り付いてつららになっていた。

＊＊＊

「一人で来たのか?!」
ツバクロは居間の入り口を見ながら聞いた。てっきり後ろから大長が着いて来る物だと思っていた。
「えと……、うん」
ユユは興奮した表情のまま答えた。
「夕方から急の仕事で、大長様もノスリ長も出払って、一人で留守番していたの。そしたらフィフィ母さんが飛び込んで来て。何も考えられなくて、夢中で……一人で、来ちゃったんだわ、アタシ……」
ユユはだんだん自分のやった事を自覚して来た。
「…ごめんなさい。大人にならなくちゃダメって、ノスリ長に

叱られたばかりだったのに…」
　項垂れた娘の頭に、ツバクロが掌を乗せた。
「大切なヒトに逢いたい気持ちが、そのヒトの元へ通ずる高空気流を見せてくれる…。お父さんもそんな経験あるよ」
「…お父さま……」

「ふにゃあ……」
　こんなに大騒ぎしていてもまだ熟睡しているカワセミが、寝返りをうってクッションからずり落ち、ユユはその頭を膝で受け止めた。
「重いだろ、頭って」
「そうでもないわ…」
　愛しい男を眺める娘を見護ってから、ツバクロは狼と連れ立って、居間から玄関ホールに出た。
　ユユの馬は、初めての単騎のジェット気流飛行をこなして、誇らしげに鼻を鳴らして興奮していた。二人で鞍を降ろして労ってやる。
「僕は一度里へ戻るよ。カワセミは大丈夫って知らせなきゃ。このままだと大長も来ちゃうだろうし、これ以上執務室に穴を開けたらノスリが胃に穴を開けてぶっ倒れる」
「そう、じゃあ、ワタシも途中まで一緒に行きます」
「そう……えっ？　ええっ?!」
「山陵の蝙蝠熊の一族に、お礼を言いに行かなくちゃ」
　狼はホールの隅の酒蔵(カーヴ)から酒瓶をガシャガシャ引っ張り出した。
「あ、ああ……けど、神殿の護りは?」
「カワセミ殿が居れば大丈夫です」
「そうなの?」
「そうです」
「…でも、夜中じゃないか。蝙蝠熊達、寝てない?」
「叩き起こせばいいんです」
　鞍袋を酒瓶でパンパンにして、狼はにっこり笑った。それ、本当にお礼になるのか…?
　もう一度、扉の隙間から居間を覗くと、ユユは暖炉の火に照らされて、さっきと同じ位置で、じっとカワセミの頭を支えている。
　デジャヴな感覚に襲われた。大昔、灌木の茂みから、同じ絵を見た記憶がある……。
　二人は静かに飛び立って、狼は途中で手を降って下降して行った。多分、蝙蝠熊達に付き合わせて、朝まで呑んだ暮れるつもりだろう。

草原の上空まで来た所で、やはり大長と行き合った。カワセミの無事を知ると眉間の縦線が消えて、ほっと安堵の顔をした。
二人並んで里への気流を辿る。
「そうですか、あの子も山を降りましたか」
「カワセミでも、門番は務まるって」
「たまには降りればいいんです。貴方もちょくちょく誘ってあげて下さい」
「ああ…、はい…」
里に小さな灯りが見えた。執務室でノスリとフィフィが心配な夜を明かしているんだろう。
「大長、先に戻って貰えますか。ちょっと寄る所があります」
大長は黙って頷(うなず)いて、馬を別(わか)って里へ降りて行った。
冬枯れのハイマツの丘で、ツバクロは膝まづいて玉石に手を添えた。
「君の尊厳を傷付けてしまった。……すまなかった……。いつだって君は幸せだった。……分かっていたのに……」
執務室に戻ると、ノスリとフィフィは帰宅していて、大長が一人で机で書類に目を通していた。
「みんなで仕事に穴を開けまくって…、明日はてんてこ舞いですよ」
「カワセミの分も、僕がやります」
「皆で分け合いましょう」
明日の仕事の段取りを付け、お茶を入れて一息ついた頃には、もう明日の入り口だった。
「そういえば、あの石、凄いですね」
「はい?」
「『運命のヒト』に巡り逢える石ですよ。薄ピンクの」
「……??…ああ！　はいはい、ありましたね、そういうの」
大長はちょっと止まって、思い出したように拳で手を叩いた。
「凄いですよね。里の女の子達が目の色変えて欲しがりそうだ」
「あれね、出鱈目です」
「…は…?!」
「ある訳ないでしょ、そんな都合の良いモノ。あったら私が欲しいです」
大長はすましてお茶を啜った。
「嘘…ですか…?　なんで?」
「あの子がなかなか煮えきりませんでしたからね。後押しがあれば自分の気持ちに気付くと思ったんです」
「……」
「余計なお節介だったですか?」

「……いえ……恩に着ます…」
すっかり信じていたのに…と、ややふてくされるツバクロを見つめながら、大長はにこやかに続けた。
「あながち嘘でもないんですよ。あの石はカワセミが祈りを込めていましたから。愛情とか、慈しみとか、そういう優しいモノに反応するんです。『運命のヒト』かどうかは、結局自分で決めるんですよ」
「…そうですね…」
＊＊＊
『その日』が来た。
花嫁の父親は朝から檻の中の狐のようにウロウロし、女達は慌ただしく駆けずり回り、男達は手持ち無沙汰だ。
花嫁の叔父の大長は残念ながら出席出来ず、一日早い御祝いを述べて、前日西風の里に飛び発った。交代で双子の兄のナナが帰って来る予定だ。
母親も…出席しない。しかし、何日か前に、雪の神殿で二人の額に手を当てて、心のこもった祝福をしてくれた。二人にはそれで十分だった。
「ナナだ!!」
手持ち無沙汰の男達が歓声を上げた。何かやる事が欲しかったんだろう。花嫁の双子の兄の出迎えに、諸手を挙げて駆け寄った。
「……!!」
しかし、ツバクロもノスリも、息子の有り様を一目見て、息が止まった。
この晴れの日に何て事…！　左の頬に真新しい切り傷、手も足もすり傷だらけ。おまけに、髪で隠しているが、右の目の回りに黒々とまあるいアザ。
「お前…？　どうした?!」
息を呑んだツバクロはやっと言葉を発した。
実は今朝がた大長よりの鷹の手紙を受け取っていた。ひと言〈ナナを、叱らないでね…〉とあって、何事かと心の準備はしていたが、これは予想を大きく越えた。
「大した事じゃないんです。晴れの日なのにこんな風体ですみません。目立ちますかね？」
ナナは罰悪そうに地べたを向いた。
「大丈夫よ、花嫁用の化粧品でごまかせるわ！」
いつの間に、後ろで野次馬していたフィフィが、しょぼくれたナナの手を引いた。
執務室はいつもの書類の山がなく、すっきり片付いている。この日の為にみんなで寝食惜しんでフル回転したのだ。

特にカワセミは今日の朝ギリギリまで健気に頑張った。ヘロヘロの所を女性陣に引っ立てられて、今頃、されるがままにゴタゴタ着せられたり飾られたりしている。

フィフィに椅子に座らされ、色々塗られてナナは何とか見られるようになった。

ああ、男って忙しい時に仕事を増やす…とブツブツぼやきながらお団子女将は去って、男の時間となる。

「さあて…ナナ…」

ツバクロは掌を組んだ。

「父親に話してくれるな…、何をやらかした?」

「まあ待て、ナナが悪さをするとは思えん。被害者の可能性もあるだろ。な、誰にやられた?」

「頬の傷は、砂の民の、ハトゥンに…」

ナナは口の中でぼそぼそっと言った。

「ハトゥン?!」

「イケ好かない野郎だったのか?」

ノスリが気炎を吐くが、ツバクロは首を傾げた。

「僕には気の良い友人だったけれど」

「ええ、良いヒトでした。だから……」

「…??」

「決闘を申し込んだんです」

「な、な、な、なんでっ??!!」

「モエギ殿を、賭けて!!」

藍色の真っ直ぐの目を上げて、息子は真剣な顔で言い切った。

「…だっ……なっ…!! な、何やってんだっ!! 他所の部落へ行ってっ!!」

父親は完全に動転してパニクって、ノスリは口笛を吹いて、ほほほおぉ〜♪って顔だ。ノスリの中では、可憐で清楚なお姫様なモエギ像が、勝手に出来上がっている事だろう。

「あんな女性(ヒト)…初めて逢いました。逢ったその日から、もう口を聞くだけでもドキドキして……」

「そ、それは、単に怖かったからじゃないのか?!」

「まあ、黙ってろ、ツバクロ。それでそれで?」

「父上の愛人だと聞いた時は、色んな意味で死にたくなりました」

「ツバクロォ〜〜?」

「だ〜か〜らぁ〜〜!!」

「でも、それは父上を助ける為の偽りだと聞いて、ますます心を奪われました。自分の名誉を傷付けてまで、ヒトを護れる慈愛に満ちた方だと…」

「ツバクロ…、お前こそ、他所の部落で何やらかしてんだ?」
「傷付くんか?! 僕の第二夫人って、傷付くんか?!」
「でも、彼女には、既に近しい男性が居たんです」
「お、いよいよ本題だな!」
「なあ…? 傷付くんか??」
「男の僕から見ても、惚れ惚れする素晴らしい男性でした。だから、このヒトからモエギ殿を奪うには、真正面からぶつかるしかない!って、思ったんです」
「いいねぇ! 熱いねぇ!」
「馬鹿、そんな事やらかしたら…!!」
「ハトゥンは受けてくれました。砂漠の真ん中で馬を使わず、真剣で打ち合ったんです」
「お、相手も漢(おとこ)だねぇ!」
「…ヤバイって…!」
「ハトゥンはかなりの使い手でしたが、僕だってノスリ長譲りの剣技では負けていられません。二人ともボロボロになりました」
「ふむ、ふむ…!」
「……」
「で、モエギ殿に見つかりました」
「おお、お姫様の御登場だな!」
「……」
「で、ぶん殴られました」
「ケンカをヤメテ〜〜っって……え? ぶんなぐ…??」
「……ハァ…」
「僕と同じアザがハトゥンの左目にも付いています」
「……」
「…私は、物ではない!! とでも言ったんだろ」
「その通りです!」
「……」
「……ハァ…」

外は明るく、お祝いの華やかな笑い声に満ちている。
「父上…」
「…なんだ…」
「今後、西風の里の常駐は、父上の回も、僕と替わって下さい」
「…なんで!」
「今回の事でハトゥンともイーブンになった気がします。後は押して押して押しまくるんでしたよね、ノスリ長!」
「あ……ああ…」
ノスリは普段からこの純朴青年に無責任な焚き付けをしていた事を、ちょっと反省した。

「お前、こんな目に会っても…」
「あの、気高さ…、誇り高さ…！　ますます心を持って行かれました！」

久しぶりの金魚の衣装(勿論寸法は直している)に身を包んだフィフィが御簾を開けて、花嫁の親族達は引っ張り出された。
祝福役のノスリは、別れ際にツバクロに耳打ちする。
「叔父譲りだな、あのマゾっ気は…」
「冗談じゃない…」
冬の白い空に花吹雪に見立てたダイヤモンドダストが舞い、本日の主人公達が入場する。
半寝のカワセミはフィフィによって背中に板が入れられている。ユユはにこやかに板と新郎を支え、総レースの衣装はキラキラと風になびいている。
本当に本当に、この子は今日、旅発つんだ…。ツバクロはやっと実感が湧いて、小さいユユが走馬灯のように駆け巡った。
双子の兄が妹に駆け寄り、祝いの言葉を述べる。兄のアザを見止めた妹と、二言三言会話している。妹は情けない顔で父を見た。父も苦笑いして肩を竦める。
ツバクロはまだまだ苦労が絶えないようだ。父親って楽じゃない。でも、楽しい苦労だ。

お祝いの鳩が飛び立って、皆の鳴らす鈴の音が、白い冬空に溶けて行った。

〜おしまい〜

二〇〇九・十二・二三

お父様のばかぁーっ
あれもダメ
これもダメ
まあまあ
結婚式の段取りだろ
間を取って俺が決めてやるなら文句ないだろ
引き出物は3kg砂糖(筆の馬型)なっ!
あと天の絵皿!
余興はオタネ婆さんの詩吟トリは俺が『ライウ』唄ってやるっ!!
ユユ!お前が決めたプランでいい?